

マントヒヒでは、ara C濃度 10mMのとき、0 (12才)、6 (6才)、15 (3才)、8 (3才)、0 (3才) 9 (2才)、13 (1才) 及び2 (0才) であった。

これらの結果から、ヒトに近縁なチンパンジーは、染色体組換え誘発効果の加齢性の変化について、ヒトと似た傾向にあることが認められたが、ニホンザルとマントヒヒではヒトと似た傾向は認められなかった。

さらに詳細な検討を加えるため、ニホンザルとマントヒヒについて、生後1ヶ月以内の新生児から経時的に、ara Cの染色体組換え誘発効果の観察を行っている。

計画：7-4

霊長類における脳代謝と脳機能の加齢変化に関する研究

中野昌俊 (愛知医大・加齢医科学研究所)

我々は、霊長類を含む各種哺乳動物を用いた研究から老化過程の始まりが性成熟期であることを明らかにした。我々は、ラット脳の microdialysis 法を用いて線状体における神経伝達物質の加齢変化を調べ、性成熟期にドパミンの代謝が最も活発であることを報告した。そこで我々は霊長類マカク族の前頭葉組織片を用いて前頭葉におけるドパミン、ノルアドレナリン、セロトニン含量の加齢にともなう変動を調べた。

サル脳 (前頭葉) の組織片約 0.1gを 0.5ml の 0.1mM EDTAを含む0.2M PCA 溶液でホモジェナイズした。水中にて30分間放置した後、20,000xgで15分間遠心分離して上清を得た。1M酢酸ソーダでpH3付近に調整した後、前処理フィルターでろ過してHPLC用標品とした。

今年度得られた霊長類の脳組織は、幼若期 (1歳前後; 未成熟)、青年期 (3歳前後; 思春期)、老齢期 (20歳前後) の動物がそれぞれ2~3例ずつであった。前頭葉における神経伝達物質の変動を調べたところ、幼若期ではノルエピネフリン (NE)、ドパミン (DA) およびセロトニン (5HT) の含量は低く、それぞれ 0.054, 0.070, 0.053 (ng/mg fresh weight) であった。青年期は神経伝達物質の含量が一段と高く、NE, DA, および5-HTはそれぞれ 0.107, 0.222, 0.089 (ng/mg fr. wt.) となり、老齢期はDAと5-HT含量は 0.111, 0.048 (ng/mg fr. wt.) と著しく低下し

た。しかし、NE含量は0.048 (ng/mg fr. wt.) で、青年期とほとんど同じであった。ドパミン性神経細胞における神経伝達物質 (ドパミン) の加齢にともなう変動は、ラット線状体および側坐核におけるマイクロダイアリシスによる結果と同じように、動物の性成熟期に最大となっている。サルにおける神経伝達物質の脳内含量に関しては例数をさらに増して検討する必要があるが、これまでの結果より、運動を支配するドパミン性神経細胞は、性成熟期にもっとも機能が最大となることが強く示唆される。次にDAとNEの代謝回転を調べたところ、幼年期が最も代謝回転が高く、青年期で既に幼年期に比較して低く老年期とほぼ同じであった。今後例数を増やしてさらに検討したい。

計画：8-2

「霊長類の口腔容量の変異と口腔の形態との関係」

茂原信生 (獨協医大・第一解剖)

この問題の出発点は、ヒトの下顎骨のオトガイ形成が、単純に言語の発達に関係して形成されたものではないことを検証することであり、そのためには霊長類一般の下顎の在り方を検討する必要があることである。ヒトは霊長類一般とは異なり、下顎骨にオトガイが形成され、シミアン・シェルフをもついわゆるニホンザル的な下顎骨ではない。一般にオトガイ形成の理由として言語能力の高さがあげられている。しかし、霊長類には舌の容積を確保するために、一定程度の口腔容量が必要であることが、オトガイ形成の理由の大きな要因であると考えている。本研究は、その研究の過程でコロボスなどの口蓋の形態が他と著しく異なることに着目して、まず霊長類の中での口蓋のあり様を探ることを目的として出発した。

口蓋に関係する諸計測項目と、主な頭蓋骨の計測値 (22項目)、ならびに口腔容量を散弾を用いて計測した。少なくとも1種あたりオス・メス各5例を基準としてデータを集積した。霊長類研究所ではおもにマカク属、コロボス属を中心に計測した。現在のところ次のような結果を得ている。

①身体が大きさが大きければ相対的に口腔容量は減少している。②原猿類では口蓋が低く、下顎も低いという原始的な形態を保持しているが、咀